歴史散歩

れきしさんぽ No.18

筑後国府跡

■筑後国府とは？■

7世紀末頃、筑紫国と呼ばれていた福岡県西部地域は、筑前国と筑後国に分国されました。筑後国が成立すると、国を治める役所が現在の久留米市合川町一帯に設置されました。それが筑後国府です。国府には、政治・儀式を行う「国庁」という中心施設を始め、その周辺には「曹司」と呼ばれる公官庁、役人の屋敷、工房などがありました。当時、日本は60あまりの「国」という行政区域に分けられていましたが、この「国」は大国・上国・中国・下国の4等級に分けられていました。筑後国は上国にあたります。奈良時代に制定された「養老令」という古代の法律によると、上国には守・介・掾・目の「四等官」という都から派遣された上級役人の「国司」・史生などの下級役人、徭丁などの労働者達が働いており、総数437人によって国府は運営されることになっています。今回は、筑後国の政治・経済・文化の中心として栄え、現在にいたる久留米の繁栄を築いた筑後国府をご紹介したいと思います。

▲筑後国の行政機関・筑後国府が置かれた久留米市合川町。写真はⅡ期国庁周辺

■筑後国府跡の発掘■

江戸時代末の久留米藩士矢野一貞は、地名や古瓦の散布状況によって、合川町の枝光一帯を筑後国府跡と推定しました。昭和36(1961)年8月、合川町阿弥陀地区で九州大学によって全国初の本格的な発掘調査が行われ、その推定が正しかったことが証明されました。この調査は1週間程度の短いものでしたが、大量の瓦や築地塀(ついじべい)の痕跡、火災の痕跡などを発見し、大きな成果をあげました。この結果、この場所に筑後国府の中心施設である国庁が存在したことが判明し、その後の発掘調査に大きな影響を与えました。

その後、昭和47(1972)年から久留米市教育委員会が発掘調査を引き継ぎ、約30年間で180回以上の調査を行ってきました。この長年の調査で、全国に類を見ない国府の姿が浮かび上がってきました。それは、国庁が時代とともに移動するということです。歴史散歩では国庁の移動についてご紹介したいと思います。

■移動する国府■

1．Ⅰ期国庁（合川町古宮(ふるごう)）

筑後国が成立した7世紀末頃、筑後国府の国庁は、合川町古宮地区に造られました。これをⅠ期国庁と呼んでいます。このⅠ期国庁は高良川を望む台地上に造られていて、周囲を幅約4～6mの築地塀で囲み、南北170m・東西80m以上の広さを誇ります。この敷地内からは、計画的に配置された掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)がたくさん発見されています。また、筑後国成立前の7世紀中頃にも古宮地区には大形の掘立柱建物群が建てられていたことが分かり、この古宮地区が重要な場所であったことが窺(うかが)えます。

▲古宮地区のⅠ期国庁の調査風景

2．Ⅱ期国庁（合川町阿弥陀(あみだ)）

8世紀の中頃、国庁は古宮地区から東方約200mの合川町阿弥陀地区に移動します。このⅡ期国庁は、南北75m・東西67.5mを築地塀で囲まれ、内部には瓦を葺(ふ)いた礎石建物が立ち並んでいました。国庁の建物配置は、中央北辺に正殿、正殿の前面に前殿、その東西前面に各2棟の脇殿を縦列配置したもので、当時、西海道と呼ばれていた九州地方を統括した大宰府政庁の建物配置を模倣したものです。瓦葺きの建物は当時非常に少なく、整然と建ち並ぶ国庁の建物は、さぞ光り輝いて見えたことでしょう。しかし、このⅡ期国庁は、天慶(てんぎょう)4(941)年に起きた藤原純友の乱で焼失したと考えられ、10世紀中頃には再び国庁は移転します。

▲Ⅱ期国庁の発掘調査では、大量の古瓦が発見されました。

3．Ⅲ期国庁（朝妻町）

阿弥陀地区から東方約600mの朝妻町では、一辺約140mの大溝で囲まれた区画が発見されました。内部からは、筑後国府跡でも最大規模の大形建物が発見され、10世紀中頃に造られた国庁であることが分かりました(Ⅲ期国庁)。

Ⅲ期国庁は、敷地の中央北側に正殿を設け、その東西にそれぞれ2棟の脇殿を配置しています。一辺約140mという規模は、全国でも最大規模のものです。10世紀中頃といえば、当時の法体制である律令制度もほぼ崩壊しつつあり、全国の国府は衰退の一途を辿っています。このような時代に、全国最大規模の国府が筑後国に造られたのはなぜでしょうか？この謎はまだ解明されていません。また、高良大社に伝わる『高良記』には、Ⅲ期国庁を指していると思われる「古苻」は「朝妻ノ下」にあったと記されていて、延久5(1073)年に「今ノ苻」に移動したと記されています。発掘調査でもⅢ期国庁は11世紀後半に廃絶したことが確認されていますので、『高良記』の記述は信憑性の高いものであることが分かります。

▲Ⅱ期国庁から出土した軒瓦

4．Ⅳ期国庁（御井町横道）

『高良記』は、「今ノ苻」についても伝えています。この「今ノ苻」と思われる掘立柱建物群は、市立南筑高校校庭で発見されました。これをⅣ期国庁と呼んでいます。Ⅳ期国庁は、『高良記』の伝えるように、11世紀後半頃に造られ初めています。正殿と思われる掘立柱建物や脇殿風の建物などがたくさん発見されていますが、12世紀後半頃にはこのⅣ期国庁も衰退してしまったようです。また、大治5(1130)年から

▲朝妻町で発見されたⅢ期国庁の東脇殿（南上空から）

仁治2(1241)年のことを記録した『筑後国検交替使実録帳』には、「国府院」の無実・破損の状況が記されていますので、武家社会に入った鎌倉時代にも、有名無実ながらも国府が存在していたことが分かります。しかし、この国府跡はまだ発見されておらず、その所在地すら分かっていません。

このように、筑後国府の中心施設である国庁は、時代とともに移動していますが、国庁の移動とともに、曹司や国司の屋敷、役人達の居宅なども移動したことも判明しています。また、これらの施設からは、国内外から持ち込まれた遺物がたくさん出土しています。筑後国府の調査はまだまだ続きます。今後の調査によって、久留米の原像が更に明らかになることでしょう。

▲筑後国府の国庁位置図(1／5,000)

▼筑後国府の国庁所在地と存続年代

	所在地	存続年代
Ⅰ期国庁	合川町古宮地区	7世紀末～8世紀中頃
Ⅱ期国庁	合川町阿弥陀地区	8世紀中頃～10世紀中頃
Ⅲ期国庁	朝妻町	10世紀中頃～11世紀後半
Ⅳ期国庁	御井町横道地区	11世紀後半～12世紀後半

●筑後国府跡については、『久留米市史』第12巻資料編(考古)久留米市史編さん委員会編にまとめられています。

●筑後国府跡についての発掘調査報告書は、久留米市民図書館や久留米市埋蔵文化財センターで閲覧できます。

◆ 歴史散歩 No.18 ◆
平成15年3月31日
発行 久留米市教育委員会
〒830－8520 久留米市城南町15－3
教育文化部文化財保護課 0942－30－9225
久留米市埋蔵文化財センター 0942－34－4995
久留米文化財収蔵館 0942－38－6194